

内容紹介

2011年7月、福島県川俣町山木屋。避難先から夫と2人で自宅に一時帰宅した妻は、翌朝、夫が草刈りをしている間にガソリンをかぶって自死した。生まれ故郷で花を愛し、野菜を育てる平凡な毎日を楽しんでいた素朴な妻は、不慣れな避難先での生活と将来への不安に心痛を極め、うつ状態になった。一方、東電は妻の死と原発事故との因果関係を否定。夫側が裁判を起こすと、東電は「個体の脆弱性」、周囲の一部は「金目狙い」と心ない言葉を放った。14年8月、裁判は全面勝訴となったが、妻は戻らない……。原発事故が奪った故郷の暮らし、無二の命の重さを問う。

初出

朝日新聞 二〇一四年九月二十六日～十月七日

※本文内の画像は、W E B用のものを転用しているため、解像度が低い場合がありますが、ご了承ください。

目 次

第1章	裁判なかったかも...
第2章	弁護士の言葉で決意
第3章	ホタルの里に生きて
第4章	山木屋に帰りたい
第5章	みるみる無口に
第6章	同じワンピース6着
第7章	小手毬の木の横で
第8章	おばあちゃんに何が
第9章	祖母が教えてくれた
第10章	「カネか」心ない言葉
第11章	判決は、言い切った
第12章	遺影と向き合う

第1章 裁判なかったかも...

2014年9月8日、福島県川俣町山木屋（やまきや）。

渡辺幹夫（わたなべみきお）（64）は山間（やまあい）の一軒家の自宅で、昼前から来客を迎える準備にあたっていた。

玄関を念入りに掃除し、仏間に座布団を並べ、お茶のペットボトルも段ボール箱いっぱい、用意した。

間もなく東京電力の幹部が、初めて、妻はま子の遺影の前に謝罪に訪れることになったのだった。

二つ年下のはま子は、福島第一原発の事故で避難を強いられてうつ状態となり、11年7月1日、自ら命を絶っていた。58歳だった。

東電は、妻の死と原発事故との因果関係を認めなかった。

幹夫は、それがどうしても納得できず、裁判に訴えていた。

その提訴から2年3カ月後の14年8月26日、福島地裁は「自殺の原因は原発事故にあった」と認め、約4900万円を支払うよう東電に命じた。

原告の全面勝訴だった。

ただ、東電は控訴するだろうと見る専門家もいた。ところが、判決に従うことを決める。さらに幹夫の求めに応じ、訪ねたいといってきた。

午後4時半、約束の時刻きっかりに福島原子力補償相談室長の近藤通隆（こんどうみちたか）（53）ら4人がやって来た。

はま子の遺影に頭を下げ、仏壇の位牌（いはい）の前で焼香し、手を合わせた。近藤は幹夫に対して言った。

「大切な奥様の貴い命を奪う結果になり、ほんとうに申し訳ありません。深くおわび申し上げます。裁判につきましても2年余り、大変なご負担をおかけしました」

4人は深々と頭を下げた。さらにはま子がガソリンをかぶって焼身自殺した庭の一角に、花を手向けた。

待ち受けていた記者が控訴断念の理由を問うと、近藤はこたえた。

「判決の内容を読ませていただき、非常にていねいな事実認定がされていた」

謝罪が遅れた理由について「訴訟になっていて、なかなか先にここに来るのは難しかった」と述べると、こうも語った。

「遺影を拝見し、やさしそうで穏やかなお顔が心に突き刺さった」

夕暮れ。近藤らが去ったあと、幹夫はぼつりと言った。

「妻もこれで安らかに眠れると思う。初めからこういう対応をして頂ければ裁判はやんなかった」

第2章 弁護士の言葉で決意

阿武隈高地の山村、川俣町山木屋三道平（みどうだいら）。

ここに住む渡辺幹夫（64）の家に東京電力の幹部が謝罪に来たのは、幹夫が東電を相手に起こした訴訟の判決が出て13日後のことだった。

妻はま子（当時58）の焼身自殺をめぐる損害賠償請求訴訟。判決は自殺と福島第一原発事故との因果関係を認め、はま子の個別の事情より、自殺をもたらした原因の8割は事故だとする賠償支払いを命じた。

認容額が3割でも、因果関係が認められれば勝訴宣言をするつもりだった弁護士にとっても「大いに評価できる判決」だった。

だが、幹夫にとってはカネのことなど、どうでもよかった。

だから東電幹部が帰ったあと、残っていた記者たちを前にこう語ったのだ。

「せめて裁判が始まる前に、こういう対応をしていただければ、裁判まではやんなかったと思う」

幹夫を支え、裁判をとともに闘ってきた弁護士、広田次男（69）も判決後の記者会見で、勝訴だったにもかかわらず怒りに震えながら話した。

「東電は取り返しのつかないことをした。それにふさわしい責任は、どうとられるべきかを問うた裁判」

「どこかの大臣の言葉のような、金目を問うた裁判では決してない」

依頼人と弁護士。

広田は、初めて幹夫と会った日のことを今もよく覚えている。

2011年12月2日。

曇り空の寒い日だった。

午前10時ごろ、いわき市にある事務所を幹夫が訪ねてきた。

川俣町議の菅野清一（かんのきよかず）（63）が寄り添っている。

菅野は幹夫の小中学校の同級生で、はま子の死後、何カ月も途方にくれたままになっている幹夫を見るに忍びなく、「いい弁護士先生を知ってつから、相談したらどうか」と連れてきたのだった。

幹夫はそれまでの人生のほとんどを、農作業や出稼ぎ、養鶏場の作業員として過ごしてきた。冠婚葬祭の時ぐらしか腕を通さないスーツに身を固め、かたくなっていた。

何から説明したらいいか、どうしていいか分からなかった。裁判を起こす、などということも、よく分からなかった。

すると広田がハッパをかけた。

「奥さん亡くして悔しくないのか、闘う気はないのか」

それが幹夫の背中を押した。

第3章 ホタルの里に生きて

原発事故による避難を苦にした農家の女性が焼身自殺した、という衝撃的なニュースは、弁護士の広田次男（69）も耳にはしていた。

口べたで正直者そのもの――。

妻を失い、途方にくれ、相談にきた渡辺幹夫（64）に対する広田の第一印象はその後も変わらなかった。

幹夫は、福島県川俣町山木屋三道平（みどうだいら）の農家に、6人兄弟の長男として生まれた。
阿武隈山地の奥深く、12軒の農家が点在する小さな集落だ。生家では米と葉タバコ、野菜を育て、肉牛を飼っていた。地元の中を卒業し、家業を継ぐのは自然だった。

2歳下の妻はま子も、同じ村の生まれ。妹の同級生で、互いによく知る幼なじみだ。

中学卒業後は青年団の活動や盆踊り、田植えなどの作業で交際を深め、幹夫が23歳のときに結婚した。

2人とも村の外に出て観光旅行などしたことはほとんどなかった。

小学校の修学旅行で宮城県の松島に行き、中学では東京で国会見学をし、東京タワーに上ったぐらい。

だから、新婚旅行も知っている松島を選んだ。

2男1女に恵まれ、子どもたちはみな、地元の高校を卒業した。

長女は東京で就職、結婚。長男、次男も会社勤めでいったん実家を離れたが、三道平に戻ってきて、数年前からは4人暮らしになっていた。

幹夫は区長として地域のまとめ役をしながら、近くの工場や養鶏場で働いてきた。

三道平は井戸水も沢水も豊かで、春は山菜、秋はキノコ、自家製の米と野菜、それに鶏肉があれば、わざわざ町のスーパーに出かけて食材を買う必要もあまりなかった。

花好きのはま子は花壇を作り、春から秋まで花が絶えなかった。

6月になると、家の横を流れる沢から大きなホタルが上がってきて、庭を群舞した。

夫妻には、生まれ育った三道平を離れる理由など、全くなかった。

2000年に農協から2500万円を借りてローンを組み、7部屋以上ある大きな家を新築した。

応接間にカラオケセットを置き、集落の人たちは区長宅に集まっては花見会、芋煮会、忘年会などを開き、はま子が手料理でもてなした。

しっかりした造りで、大震災の揺れにも大きな被害はなかった。

福島第一原発から40キロ。山奥のこの集落に、放射能被害が及ぶとは、思いもしなかった。

第4章 山木屋に帰りたい

あの日、2011年3月11日。

福島県川俣町山木屋三道平（みどうだいら）に暮らす渡辺幹夫（64）の家に、大きな被害はなかった。

近くの養鶏場で働いていた幹夫とはま子（当時58）はもちろん、会社勤めの息子たち2人も、その日のうちに帰宅した。

それから3日間停電が続いたが、山木屋にも深刻な被害はなかった。

だが、福島第一原発では12日午後1号機の原子炉建屋が、14日には3号機の建屋が爆発。山木屋の一部ではその後、毎時10マイクロシーベルト近い高い放射線量が観測され続ける。

しかし、孤立した山村で暮らす幹夫らに知る術（すべ）はなかった。

15日未明、ようやく電気が復旧、テレビを付けていた幹夫らは「4号機爆発」のニュースに驚いた。

「三つ目の爆発」と聞いてさらに驚いた。

区長の幹夫は集落の12世帯に避難を呼びかけ、全員が避難したのを見届けてから、家中のガソリンを1台の乗用車に集め、家族4人の逃避行に出た。

福島市内の親戚宅を経て、磐梯町の体育館で数日を過ごしたころ、はま子が、山木屋に戻っている住民もいる、と人づてに聞いてきた。

そして「帰りたい」と言い出した。

幹夫には放射能についての正確な知識もなく、判断しかねた。

ただ、いつも冷たい握り飯2個にたくわん2きれ、カップ麺という食事や、仕切りもなく毛布にくるまって寝る生活には限界を感じていた。

はま子の「着替えが足りない」「家のことが心配」という訴えにこたえ、3月20日、一家は山木屋に戻ることを決断する。

マスクをし、手袋をはめての生活だったが、はま子は「やっぱりうちはいいね」と繰り返した。

だが、国は4月22日、山木屋地区を「計画的避難区域」に指定する。年間積算線量が20ミリシーベルトを超えるおそれがあるとして、避難を呼びかけたのだ。

三道平の住民たちも町が用意した福島市内の温泉旅館などに避難していった。幹夫たちの次男（38）も、勤務先の二本松市内にアパートを借りて引っ越した。

6月になっても三道平に残っていたのは渡辺家の3人だけになった。

6月12日、幹夫とはま子は福島市内の3階建てアパートに移る。長男（40）も勤め先に近い郡山市内に転居。夫婦は避難先で2人きりになった。

第5章　みるみる無口に

2011年6月。

阿武隈山地の山村に暮らす渡辺幹夫（64）は、福島第一原発の事故で、自宅のある山木屋地区が「計画的避難区域」に指定され、自慢の大きな農家から、福島市内のアパートの一室に引っ越すことになる。

その直前、妻はま子（当時58）は立て続けに不安を漏らし始めた。

「家族ばらばらになっちゃって。いつになったらまた会えんの？」

「東電からの仮払金、100万円でいつまで暮らせるかねえ」

「アパートなんて住んだことないから怖い」

アパート暮らしが始まると、働き者で社交的で明るかったはま子が、みるみる無口になり、食欲もなくなり、家に閉じこもるようになった。

たまに幹夫とスーパーに出掛けても、買う物を決められずに空のカゴで店を一周して戻ってきたり、外出に行っても、料理を決めることさえできなくなったりした。

てきばきと何でも自分から決めるはま子を見てきた幹夫には、そんな妻の姿は信じられなかった。

逆に狭いアパートの中で、はま子は「声が大きい。隣に聞こえる」と幹夫に神経質に注意した。山木屋の自宅は、隣家までの間に丘と谷があり、数百メートルは離れていた。

1千万円以上も残っている家のローンのことも心配していた。

「ジロジロ見られる」「田舎者だから着ているものがおかしんだ」

そんなことも言うようになる。

故郷を汚され、大切な家を失い、家族と離れ離れになり、夫と働いてきた養鶏場の仕事や、大好きな野菜作り・花作りも奪われ、知り合いもいない街の中に放り出された――。

そんな妻の心をもっとわかってやるべきだった、と幹夫は悔やむ。

親族や同級生の葬儀が相次いだ。外出を嫌がる妻を置いて幹夫が式に出た。帰宅が深夜になると、はま子は泣きじゃくって責めた。

「なぜもっと早く帰ってこなかったの」

「いつ山木屋に帰れるの」

6月29日。幹夫は夕食を取りながら言った。

「あした1泊で山木屋に戻らないか。周りの草さ伸びてるし、草刈り目的で1泊してくっぺ」

「何時ごろ行くの」。久しぶりに妻に笑顔が戻った。

2人とも翌朝5時には目が覚めた。幹夫は、はま子が服装を気にしていたことを思い出し、途中で洋服店に寄ることにした。

第6章 同じワンピース6着

2011年6月30日。

福島第一原発の事故で、福島市内のアパートに避難していた渡辺幹夫（64）と妻はま子（当時58）は、川俣町山木屋三道平（みどうだいら）の自宅に1泊だけ帰ることにした。

2人を乗せた車は午前10時ごろ、川俣町の中心街に着いた。

服装を気にしていた妻のために、幹夫は「ファッションセンターしまむら」に寄った。

「何買っていいか、わがんねえんだ。着るもの選んで」

幹夫は、てきぱきとものごとを決めてきた妻が、そんなことを言うのを初めて聞いた。

「男が女物の衣類を見るのは格好がつかない」「何でもいいから好きな物買ってこ」

幹夫はそう言い残して外に出た。

しばらくしてはま子は大きな紙袋を抱えて戻ってきた。

幹夫が「何買ったんだ？」と尋ねても「うーん」と言うだけだった。

はま子の死後、山木屋の自宅で、長女の和加子（わかこ）（36）は、手つかずの紙袋を見つけた。

母は、全く同じ種類の、色違いのワンピースを6着も買っていた。

町の中心部から、渡辺家のある三道平の集落までは、トンネルをくぐり抜け、上り坂の山道を15キロほど行かなければならない。

「田んぼがこんなになっちゃったんだ」

人が去り、荒れ放題の水田の光景が続いた。それでも山木屋が近づくにつれ、はま子は冗舌になり、うきうきと弾んだ声になっていた。

昼前に自宅に着くと、「私たちが造ったうちはびくともしないね」と喜んだ。

夕方。幹夫は、故郷の山々を見渡せる大きな窓辺のソファで夕食を取ろうと持ちかけた。

遠くに、はま子の実家も見える。

幹夫はビール2本と焼酎のお湯割り2杯を飲んだ。はま子にも勧めたが、妻は震災後、ほとんど酒を口にしなくなっていた。

計画的避難区域での宿泊は本来、禁じられている。

「あす午前中には戻るかな」

幹夫がそう言っても、はま子はずなずかなかった。「あしたじゃなくてもいいべ」「やっぱり我が家はいいね。せいせいすつべ」

「朝起きて、草刈りやったら午前中には戻るつべ」。幹夫が念を押すと、意外なこたえが返ってきた。

「あんたひとりで戻ったら」

第7章 小手毬の木の横で

「馬鹿なこと言うんでねえ」

2011年6月30日夜、避難区域にある川俣町山木屋の自宅に一時帰宅していた渡辺幹夫（64）は、ここに残ると言い張る妻はま子（当時58）に、つい声を荒らげた。

「避難先のアパートには戻りたくない」「あんた1人で戻ったら。私はここに残る」

冗談だと思ったかった。だが、妻が冗談を言っている様子はなく、幹夫は会話をやめた。

2人は午後9時ごろ床に就く。幹夫は午前1時ごろ、目覚めてトイレに行った。布団に戻ると、はま子が泣きじゃくりながら幹夫の腕を、ぎゅっとつかんで離さなかった。

「大丈夫だから」

幹夫は妻の手を握り、再び眠った。

7月1日未明、幹夫が目覚めると、はま子はまだ眠っていた。

午前5時ごろ。幹夫はそっと起き出すと、草刈り機の手入れをし、裏手の土手から刈り始めた。

半時間ほどして、土手の向こうのごみ焼き場の方から、ポッと火柱が上がるのが見えた。

「はま子のごみか古い布団でも燃やしているんだべな」

幹夫はそのまま草刈りを続けた。

午前6時半ごろ、自宅に戻り、シャワーを浴びてテレビをつけた。

午前7時が過ぎた。

しかし、はま子がいつものように「ごはんだよ」と呼びに来ない。

家の中を捜し回ったが、いない。外に出て「おい」と呼びながらごみ焼き場の柳の下に向かった。

まだ煙が上がる中、2人で植えた小手毬（こでまり）の木の方に倒れるようにして、はま子が燃えていた。

言葉を失った。

すぐに素手で火を消そうとして、やけどを負った。

その後はよく覚えていない。

バケツで水をくみにいき、戻ってきたら火は消えていた。

消防署、警察署、子どもたちに次々に電話したようだ。

はま子は、物置にあった農機具用の混合油とガソリンを運び出してかぶり、仏壇の百円ライターで火を付けたらしい。遺書などなかった。

世話好きで、明るくて、花と野菜を育てるのが生きがいで、農協の品評会で出品した大根が表彰されたのを自慢していた。

その妻が、なぜ――。

2日通夜、3日葬儀。

おばあちゃん子の初孫の樹里（じゅり）（15）も、神奈川県大和（やまと）市から駆け付けた。

第8章 おばあちゃんに何が

福島で暮らす大好きなおばあちゃんとおじいちゃんが大変だ。

渡辺はま子（当時58）と幹夫（64）の初孫、樹里（じゅり）（15）は2011年3月の東日本大震災後、両親からそう聞かされていた。

震災に次ぐ原発事故で会津の温泉に逃げたり、川俣町山木屋の実家に戻ったと思ったら、今度は福島市に避難しなければならなかったり。

樹里たちが住むのは神奈川県大和市。なにかあるたび、母の和加子（36）は、おばあちゃんと長電話していた。

「2人とも避難して無事。大丈夫だから」

和加子はこう教えてくれたが、樹里は震災後、おばあちゃんとは直接、話せていなかった。

「でも、夏休みには必ず、山木屋で会えるから」

当時、中学生の樹里は、そう信じて待つことにしていた。

しかし、はま子は6月に入って福島市内のアパートに移ると、和加子との電話で愚痴をこぼし、泣き出すことが多くなっていた。

「都会暮らしは初めてだし、ごみの分別もわかんねえ。避難民だ、田舎者（いなかもの）だと思われている」

「ここは庭もねえし、野菜も作れねえ。野菜とか買ったことねえから1回にどんくらい買えばいいか」

「養鶏場の仕事もなくなったし、家のローンをどうやって払っていけばいいのかわかんね」

6月22日か23日。

「夏休みは帰ってこなくていいぞ。和加はそっちで頑張れ」

そう言ってきたのが、はま子と和加子の最後の会話になった。

避難先の狭いアパートだから仕方ない。和加子も樹里も、そう思うしかなかった。

7月1日。樹里は、中学校で朝の授業が始まってまもなく、担任の教師から「すぐに帰宅するように」と言われた。

「おばあちゃんたちに何かあったんだ」

胸騒ぎがした。徒歩で10分ほどの距離を走ったり、急ぎ足で歩いたりして帰った。もどかしかった。

玄関を開けると両親がいた。母は泣いていた。いきなり、「おばあちゃんの死」を知らされた。

ともかく新幹線とバスを乗り継いで家族で山木屋に向かった。実家に着いたのは、遅い午後だった。

棺（ひつぎ）の上に、はま子の笑顔の写真があった。悪夢を見ているようで、信じられなかった。

第9章 祖母が教えてくれた

「たべらっしえ」

福島県川俣町山木屋に生まれ育った渡辺はま子（当時58）は、食卓でよくこう言った。召し上がれ、といったところか。

神奈川県大和市に暮らす初孫の樹里（15）は「おばあちゃんのマネ」と言っでは、この言葉を使い、家族を笑わせていた。

盆と正月には帰る母の実家・山木屋は、都会育ちの樹里にとって、別世界だった。

おばあちゃんと花を植え、菜園のキュウリやトマトをもいで食べ、「あじご飯」という山菜の炊き込みご飯の作り方を教えてもらった。

冬は、おじいちゃんの幹夫（64）が作ったソリに乗って、おばあちゃんと一緒に遊んだ。

その祖母が、福島第一原発の事故で避難を強いられた末、山木屋に一時帰宅中、自死した――。

樹里は葬儀で1週間、学校を休んだ。その後は、中学1年生の日常に戻っていったが、写真の中の笑顔の祖母が「もうこの世にいない」ということが理解できなかった。

「命」について考えるようになる。

1年後、学校の弁論大会で、原発事故の避難指示区域に取り残されたペットや動物のことを話す。

「命の大切さ」と題するスピーチは、その年の優秀賞を受賞した。

そして、3年生の秋の弁論大会では、祖母のことを取り上げた。

「私のおばあちゃんはまだ50代。朝から元気に草刈り、畑仕事、昼は会社の仕事に出かけ、その他家事すべてを毎日1人でこなすというような、明るく元気な人でした」

そんな祖母が、避難生活の中で地域の人たちとも離ればなれになり、話す人もいなくなり、病気になっていったことを訴えた。

「被害にあった人は『これからの人に同じ思いをしてほしくない。こんな思いをするのは自分たちだけでもうたくさんだ』と思っているはずです」

「だから私も、祖母が亡くなってしまったことをただの悲しみと思わず、大震災の恐ろしさを身をもって教えてくれたのだと思うことにしました」

そのスピーチ「忘れてはならない悲劇」も、優秀賞を受賞した。

樹里は幹夫に、そのスピーチのDVDを贈った。

幹夫は山木屋の自宅に一時帰宅すると、ひとり静かに見る。

妻が孫に乗り移ったようで、自然と、涙があふれてくる。

第10章 「カネか」心ない言葉

福島第一原発の事故で、川俣町山木屋の自宅から避難を強いられ、うつ病を発症した渡辺はま子（当時58）。彼女が自宅に一時帰宅中、自死したのは2011年7月だった。

「忘れてはならない悲劇」

孫の樹里（15）は13年10月、こう題したスピーチで、大好きだったおばあちゃんのことを取り上げ、学校の弁論大会で優秀賞を受ける。

「3・11の悲劇を無駄にしないためにも、私たち一人ひとりが、自分の身を守る対策を、改めて見直さなくてはならないのです」

孫娘が祖母の悲報を受けて、こう語るまでには2年の歳月が必要だったのかもしれない。

まして、妻を失った夫・幹夫（64）の喪失感は深かった。

はま子の死後、もんもんとして何も手につかない日々が続いた。

避難先の福島市内のアパートには戻る気にはなれず、11年7月23日、川俣町内の農村広場にできた仮設住宅に、一人で引っ越した。はま子の位牌（いはい）だけは持っていった。

眠れない夜が続く。睡眠薬の力を借り、朝から酒を飲む日もあった。

除染の日雇い労働にも出てみたが、気は晴れなかった。

9月になって、東電から、避難を強いられたことに関する賠償請求の申請書類が届いた。

そこに、はま子の分はなかった。

ほどなくして説明会が開かれた。

「死んだ者への責任は取らないのか」

いつになく食いが下がったが、答えは得られなかった。

納得いかなかった。でも、どうしていいかわからずにいた。

この年の暮れに、同級生の紹介で弁護士の広田次男（69）と出会い、提訴を決意する。

ただ、子どもたちも原告にするかどうか、悩んだ。そうでなくても、避難指示区域の住民らは、「賠償金で遊んで暮らせるからいいな」などという中傷にさらされていた。

結局、娘も息子たちも提訴することにうなずき、原告に名を連ねることに同意してくれた。

12年5月、提訴が報道された。

「母親が亡くなったのをいいことにカネ取りにかかってんのか」

長男（40）の職場では、こんな言葉を投げつけてくる者も現れた。

裁判が始まると、幹夫はさらに、思いも寄らぬことを聞かされる。

東電側は、はま子個人の「性格傾向」を取り上げて、反論してきたのだった。

第11章 判決は、言い切った

渡辺はま子（当時58）の自死は、福島第一原発の事故で避難を強いられたことによるものだ――。

裁判でそう訴えた遺族は、被告・東京電力から思わぬ反論を受けた。

性格傾向を持ち出してきたのだ。

東電は、はま子が震災前から不眠を訴え、睡眠薬などを処方されていたことを指摘。その性格について「心配性で傷つきやすく、環境の変化に弱いところがある」と強調した。

「このようなはま子の個体側の脆弱（ぜいじゃく）性を考慮するときは、自死に至った原因が、本件事故にあるとすることはできない」

「個体の脆弱性」

その言葉に、夫の幹夫（64）ら家族の心は凍った。

「血の通わない冷たい法廷用語ではま子がさらに傷つけられている」

東電幹部は、言葉の真意を問われて、後にこう釈明している。

「一つの要素として、そういう主張があったことは事実だが、裁判の中では、いろんな要素を考慮して損害の（責任の）分担を考えていく」

原発事故による避難者は様々なストレスを抱えている。だが、自死には至らない人が多数だ。自死は、はま子固有の心の要因が大きい。

それが東電の主張だった。

だが福島地裁は診療記録や服用薬を詳細に分析、既往症も認めたうえで、8月26日、こう認定する。

はま子は原発事故により、うつ状態になった――。

はま子が生まれ育ち、58年余り暮らしてきた川俣町山木屋。地域住民との密接なつながり、安住の地で働き続けることへの願い……。

判決は、かけがえのない「故郷の価値」を列举した。

さらに、孫の樹里（15）の存在と役割にも言及した。

「はま子は樹里が自宅を訪れた際、樹里を畑に連れて行き、その場で野菜を食べさせることもあった。はま子が野菜を作ることは、自家消費だけでなく、地域住民や孫との交流のための意味も有していた」

そんな生活環境を一举に奪われ、突如、「終期の見えない避難生活」に放り込まれる。

短期間に次々と襲った「強いストレスを生む出来事」は、「健康状態に異常のない通常人にとっても、過酷な経験となる」と、判決はいう。

そのうえで、こう言い切った。

「避難によるストレスの結果、精神障害を発症して自死にいたる者が出現するであろうことも、被告において予見可能だった」

第12章 遺影と向き合う

「本来ならば家族でお迎えするところ、不都合があり、きょうはひとりで対応させていただきたい」

2014年9月8日、福島県川俣町山木屋。

渡辺幹夫（64）は東京電力の幹部を自宅に迎えた際、こう切り出した。

福島第一原発事故で避難を強いられ、自死した妻はま子（当時58）。東電幹部は、その焼香と謝罪に初めて訪れたのだった。

幹夫の側に、どんな不都合があったのか。彼は長男（40）が勤め先で中傷を受けたことを説明した。

裁判を起こした後、「避難者なら働かなくても賠償金で遊んで暮らせるじゃないか」「母親が亡くなってまたカネを取りにかかるとか」。そんな言葉にカッとなってトラブルを起こし、会社を辞めることになったという。

新たな勤務先でやっと落ち着き、頑張っているときに、報道のカメラの前に身をさらしたくないという。

次男（38）も同じ理由で同席したがらなかったという。

幹夫は、そんな不都合を、とつとつと語った。

提訴から2年3カ月。8月26日にあった福島地裁の判決は「非常にいていねいな事実認定」（東電幹部）で「原告全面勝訴」を言い渡した。

以来、「カネ目当て」などの中傷や陰口もあまり耳にしなくなった。

「この事件の本当の解決は決して金目でないことを理解してほしい」

弁護士の広田次男（69）も、ことあるごとに訴えてきた。

幹夫が最も望んでいた「誠意ある謝罪」の実現で、彼の「張り詰めた心」はほぐれていった。

だが一方で、「はま子はもう帰ってこない」のも事実だ。

幹夫は今、町中心部の仮設住宅から毎週のように山木屋に戻り、家の中を掃除し、妻の遺影と向き合う。

山木屋は除染が進み、町は16年春の避難指示解除をめざす。そのとき幹夫は故郷の家に帰るつもりだ。

だが、いったん放射能に汚された土地に、若い世代はどれだけ帰って来るだろうか？

「息子たちはもうここでは暮らさないでしょう。孫と時々帰ってきて一緒に酒を飲んでくれるくらいか」

星降る夜空に向かって、原発事故など知らぬように秋の虫が騒ぐ。

山里を雪が閉ざす前に、幹夫は、行く末のことも考えておこうと思っている。

プロメテウスの罯〔54〕 妻よ「故郷を奪われた不安が自死を招いた」

著 者 朝日新聞（本田雅和）

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com>

2014年11月6日 WEB新書版発行

2015年12月31日 EPUB版発行

©2015 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86612-566-4

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2014年11月6日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。